

「小特集」にあたって

滋賀大学名誉教授

門 脇 延 行

今回の経済学部フォーラムは、2005年の12月15日(木)に「CSR（企業の社会的責任）－日本の企業と社会－」というテーマで開催されました。これは、大学が教職員と学生だけからなる狭い閉じた知的空間に留まるべきではなく、広く社会に開かれたオープンスペースとしてもあらねばならないという考えの下に、一昨年から開かれてきたフォーラムの第3弾の企画です。

CSR は今日一種のブームになっています。翻って、80年代は、日本の経営が世界を席卷せんばかりの勢いで、ジャパン・アズ・ナンバーワンともてはやされていたかと思うと、90年代のバブルの崩壊と共に、今度は平成大不況の元凶があたかも日本の経営でもあるかのように叩かれ、その見直しと共に、ごく最近までコーポレート・ガバナンス（企業統治）のあり方が大きな議論を呼んでいました。ところが、今やCSR（企業の社会的責任）の時代といわれるほどです。しかし、昨年4月のJR 西日本福知山線列車転覆事故という大惨事や秋の耐震強度偽装事件などを目の当たりにすると、一体、日本の企業の社会的責任はどうなっているのか、と疑問に思われます。企業というものは、資本主義の下では、社会的に必要な財の生産やサービスの提供を通して利益を追求することをその目的として活動するものであることを承知しています。誰もそのこと自体を問題にしているわけではありません。

しかし、利益追求のために何をしてもよいというものではないこともまた衆知の筈だ、と思っていました。最低限、社会的なルールを守り、しかるべき規律をもって利益獲得活動を行うものと了解されていました。が、不幸にも上のような事故や事件が相変わらず起こります。この事態をどのように考えればい

いのか。企業がかくあるためには、どうあらねばならないのか、それが今問われているのではないか。この機会に「企業と社会の関係」を考えてみよう、今回の企画を立てました。

当日は、最初に一橋大学教授の谷本寛治先生に「CSR（企業の社会的責任）を考える」というテーマで、次に、シャープ株式会社常務取締役の中川敬氏に「シャープのCSRの取り組み」というテーマで、ご報告を頂きました。

谷本先生は、その最初の著作『企業権力の社会的制御』（千倉書房、1987年）から、『企業社会システム論』（千倉書房、1993年）、『企業社会のリコンストラクション』（千倉書房、2002年）、『CSR経営—企業の社会的責任とステイクホルダー』（中央経済社、2004年）、そして最新の編著『ソーシャル・エンタープライズ—社会的企業の台頭』（中央経済社、2006年）まで、NPOの研究も含めての主要業績において一貫して「企業と社会の関係」を研究してこられています。日本におけるCSR研究の第一人者と呼ばれるにふさわしい方です。

また、シャープ株式会社は、比較的早くからCSRに積極的に取り組んでいる会社の一つで、『日経ビジネス』が行った「2005年度CSR「力」総合ランキング」で見事一位に輝かれています。中川氏はその会社のCSR推進室統轄部長として、CSRの現場の責任者であります。その意味では、CSRの理論と実践の、それぞれの領域で最先端を走られている谷本氏と中川氏のお二人の意見をお聞きする機会が持てたことは大変幸せなことでした。CSRの現状と課題の問題点と企業の先進的なCSRの取り組みの実際がよくわかり、有意義なフォーラムだったと思います。